

1 「初めに、語りの世界は全然一般的ではないという事実を押さえないと」
小学校や図書館に呼んでいただいて、ものがたりライブを終えたあと、
聞いてくれた校長先生や館長さんから「話術がお上手ですね」とか
「よくあんな長い話が覚えられますね」とか、ほめられることがある。
もちろん、社交辞令とわかっているから、ぼくも「いえいえ」と謙遜して返す。
だが、正直に言うと、ほめられているにもかかわらず、あまり嬉しくない。

たとえば、ぼくたちはピアノのコンサートに行って、ステージを終えたピアニストに
「ピアノがお上手ですね」とか「よく、まちがえずに弾けますね」とかほめるだろうか？
どう考えても、それはほめことばにはならない。
ピアニストが人前でピアノを弾く以上、上手にまちがえずに弾けるのは前提に過ぎない。
勝負はその上で、なにが表現できるかにかかるのだ。

語りも同じで、話がじょうずなもの、長い話をまちがえずに
語れるのも、それは前提であり、その上でどれだけ、いい時間を作るにかかる。
ぼくはゴルゴ 13 ではないが、雇われた以上、そこにもものがたりの語りを軸とした
楽しい時間を作ることができたことをもって、依頼に応えられたと初めて思う。
そして、そこを評価してほしいのだ。

と、こう書けば、みな「それはそうだ」と納得してくれるだろうに、
なぜ、語りの世界では上記のようなほめことばになってしまうかといえば、
たいていの人は人生の中で、そう何度も語りのステージを
見聞きしてきていないからだ。語りを聞いて楽しい時間を過ごした経験がない。
いいかえると、語りで心が動いた経験が少ない。指標となる名人を知らない。
だから、どう評価していいかわからない。
だが、なにかほめないと悪いと思うから、つい、最初のような勘違いのほめことばになる。

なぜ、こんな話から書きだしたかという、ようは「語りの世界は全然一般的ではない」
ということを最初に押さえておかなければいけないからだ。
一部の話を語るのが好きな人と、一部の語りを聞くのが好きな人たちのいる空間を見て、
なにかその世界が確立され、認知されているかのように思うのは、全体を見誤る。
ちょうど、図書館の司書が、図書館に来る子だけを見て「子どもはみんな本が好きだ」
と
思うのが見当違いなのと同じように、語りが好きという人は大人も子どもも、ごく一部だ。
しかし、ものがたりの語りの世界には、やはり莫大な宝物がつまっている。
その宝物を大人も子どももみんなでわかちあうためには、どうすればいいのか。
そういう大きな目標を頭の隅に置きつつ、しかし、ステージで感じたさまざまな思いを
なるべく具体的に、そして、きれいごとにならないようにつぶっていければと思う。